

論文

Edgar Linton 論

—愛と階級—

服部 茂

要 旨

Wuthering Heights (1847; Emily Brontë) は、Linton 家がどのように描写されているか読み解くことによって、この作品における社会背景、社会風潮を知ることができる。Linton 家において何が良いものとされ、何が悪いものとされたのか、また何に惹かれ、何を疎ましく思ったのか。登場人物たちとどのような価値観を共有して、どんな時代の制約を受けているか。Linton 家は、当時の時代背景を代表する家族である。この作品は、その Linton 家の価値観を前提に描かれている。それは、伝統的な社会と階級意識である。本論では、そのような環境の中で生きる Linton 家の Edgar の愛に焦点を当て作中における彼の立場、行動、嗜好をふまえた上で、Edgar の愛とは何か、その愛がどのように展開していったのかを考察し、Edgar の愛の一端を論じる。

キーワード：地主階級、階級意識、社会制約、人生、生き方、愛情、愛すること

Nelly は、Edgar と Heathcliff の違いを、“The contrast resembled what you see in exchanging a bleak, hilly, coal country for a beautiful fertile valley” (VIII) と両者を喩える。“coal country” は、Heathcliff で “fertile valley” は Edgar のことをいう。また、*Wuthering Heights* に戻ってきた Heathcliff を “He (= Heathcliff) had grown a tall, athletic, well—formed man, beside whom, my master (= Edgar) seemed quite slender and youth—like” (X) と比べる。つまり、Heathcliff を「硬」、 「強」、 Edgar を「軟」、 「弱」とその違いを強調する。それは、外見上の Edgar の姿である。

一方、内面的な部分において、Nellyは、“My heart invariably cleaved to the master’s … with reason, I imagined, for he was kind, and truthful, and honourable” (X) と Edgar の性格や人柄を高く評価し、彼女は Edgar に信頼を置く。彼の性格は、「冷静」、「知性」、「善意」である。そこから、読者に Edgar の「善」の印象を与える。しかしながら、中には Linton 家の文化、Edgar の教養を権威の象徴と考え批判する研究者も少なくない。たとえば、S・Gilbert と S・Gubar は、“… the power of the patriarch, Edgar’s power, begins with words, … Edgar does not need a strong, conventionally masculine body, because his mastery is contained in books, wills, testaments, leases, titles, rentrolls, documents, languages, all the paraphernalia by which patriarchal culture is transmitted from one generation to the next. Indeed, even without Nelly’s designation of him as “the master”, his notable bookishness would define him as patriarch”¹⁾ と Linton 家に横たわる家父長制を指摘し、Edgar は、自らの力ではなく、社会制約の中においてしか彼の力が及ばない、つまり無能だと暗に示唆する。Edgar 寄りに考える Nelly もまたその犠牲者であると批判する。家父長制も時代の社会的制約の一つである。だから、彼女らの指摘も社会制約からの重要な論考である。

Edgar は、地主階級であり不労所得者である。日々の肉体労働に従事しているのではないので、その体つきも労働者階級のそれとは歴然と違うのである。屋敷の Thrushcross では、複数の使用人を雇用し広大な面積を所有し、御者つきの馬車を所有する。身なり、服装、話し方は典型的な地主階級を描き出している。彼は、少なくとも当時の紳士としての必要な要素を身につけている。さらに、Linton 家には、世論が存在している。その世論の影響を受け、ある意味、監視されている。現に、Catherine が体調を崩したという知らせは、村では噂になったのである。

父 Linton においては、その責任、義務感が強く Catherine と Heathcliff が Thrushcross にまぎれ込んだ場面では治安判事の立場で、Heathcliff を捕らえ “… would it not be a kindness to the country to hang him at once, before he shows his nature in acts, as well as features? (VI) と厳しく咎めている。悪人を取り締まり、治安の保全を保とうとする治安判事としてのその権力、威厳を示すものである。Linton 家は、そのとき一緒にいた、Wuthering Heights の娘 Catherine には、特別な待遇をする。Heathcliff とは、対照的に手厚く世話をする。ここに、Linton 家の階級意識からくる特徴と、England 社会の階級格差が描かれている。階級の付き合いは、同じレベル同士しか社会的な交際をもたない。当時の階級に基づいた社会では、同じ地域で上流階級と労働者階級は、別々の場所に居住して、まともな付き合いはなかったという。Heathcliff と Edagr は、その立場、身分からも彼らは相容れない関係は当然のことである。その出生からも違うのである。彼ら二人は、男の友情どころか、その存在すら認められないのである。Edgar にとって彼は、友人になることは、Edgar の言葉を借りれば “disgraceful”

ということである。あくまでも Heathcliff は、“the gipsy”であり“the plough—boy”なのである。妹 Isabella のことでも例外ではない。どのような理由にせよ身分違いで結婚をすれば、Edgar は、その血縁関係すら打ち切ってしまうのである。Edgar は、“I am not *angry*, but I’m *sorry* to have lost her (= Isabella) … we are eternally divided” (XIV) と言い、最後には、“… if she (= Isabella) were so insane as to encourage that worthless suitor, it would dissolve all bonds of relationship between herself and him (= Edgar)” (XI) と言わしめたのである。

Wuthering Heights には、長男である Hindley がいる。Linton 家と並ぶ伝統ある屋敷でどちらとも地主階級であるが、その社会的な外面とは対照に、内面の環境が大きく違うのである。Wuthering Heights の主人 Earnshaw は、Hindley と Catherine に対してとくべつ教育熱心ではない。教育は、牧師補が担当してはいるが効果は示されず、主に使用人の Joseph が聖書を基に彼らの行いを偽善的な思想で担当している。やがて、Hindley は酒におぼれ、博打にはまり、自ら身を持ち崩してしまう。Heathcliff の死後、娘の Cathy と Hareton が結婚することになり、元来、Earnshaw 家の屋敷である Wuthering Heights が本来の血筋の子孫に受け継がれるまで、一時的にあるにせよ、Heathcliff にその土地と財産を奪われてしまう。博打と酒は、墮落した労働者階級の特徴である。Hindley は、大学に送られるがその教育成果も垣間見ることもなく、またそのときの詳細すら描かれていない。実際に大学に通ったかどうかとも疑わしいのである。一方、Thrushcross の跡取り息子 Edgar は、Catherine と結婚し、その後も彼が育った環境が生き方に反映され、慣習を踏襲し、自立し、節制した生活を送り、屋敷を守っていかうとするのである。しかしながら、両者つまり Hindley と Edgar は、その過程に違いがあるにせよ最終的には同じ境遇に達するのである。Edgar も妻 Catherine の死後、治安判事の職を捨て、また教会にも参加せず、ただ屋敷に引きこり、読書室の本だけと付き合う生活になってしまうのである。Nelly は、二人の違いを次のように思案する。

I used to draw a comparison between him (= Edgar), and Hindley Earnshaw, and perplex myself to explain satisfactorily, why their conduct was so opposite in similar circumstances. They had both been fond husbands, and were both attached to their children; and I could not see how they shouldn’t both have taken the same road, for good or evil. But, I thought in my mind, Hindley, with apparently the stronger head, has shown himself sadly the worse and the weaker man. When his ship struck, the captain abandoned his post; and the crew, instead of trying to save her, rushed into riot, and confusion, leaving no hope for their luckless vessel. Linton, on the contrary, displayed the true courage of a loyal and faithful soul: he trusted God; and God comforted him. One hoped, and the other despaired; they chose their own lots, and were righteously doomed to endure them. (XVII)

二人の性格の違いが人生の運命を分けたのだと Nelly は考えているようである。ここに示唆

されていることは、墮落しようとしまいと、自己の選択ということである。Hindleyは、墮落する「破滅」型であり、自分の性格が災いして悪い事態を誘発したり、悪化させたりする性格で、Edgarは、「運命享受」型ではあるが、良質な素質が、悪い事態を軽減させたり、招いたりするのを避ける力をもっている。それに、両者どちらも厳しい父親がいたのだが、Hindleyに正しくその厳しさが継承されず、Edgarは、その性格ゆえ消えてしまったかのようである。唯一、共通して継承したことは、周辺の人たちに対して、権威と権力を誇示することである。Nellyの言い方を借りれば、一方は正しく、もう一方は不適切に使われたのである。前者がEdgar、後者がHindleyであることは明白である。

Thrushcrossの内面においては、Linton家の教育力にも注目である。いつしかThrushcrossにHeathcliffとCatherineがまぎれ込んで以来、Catherineは、五週間にわたり屋敷で過ごすことになる。その後、彼女は、見違えるほど上品な女性に変わるのである。そのときの模様をNellyは次のように語る。

Cathy stayed at Thrushcross Grange five weeks, till Christmas. By that time her ankle was thoroughly cured, and her manners much improved. The mistress visited her often, in the interval, and commenced her plan of reform by trying to raise her self-respect with fine clothes and flattery, which she took readily: so that, instead of a wild, hatless little savage jumping into the house, and rushing to squeeze us all breathless, there lighted from a handsome black pony a very dignified person, with brown ringlets falling from the cover of a feathered beaver, and a long cloth habit which she was obliged to hold up with both hands that she might sail in. (VII)

Thrushcrossの環境を物語る場面である。荒野で野性的に育ったCatherineの変身振りは目を見張るものがある。それは、表面上の変り様ではあるが、本来は、Earnshaw家の躰である。強烈に個性の強いCatherineを変えてしまうLinton家の教育力は、そのことが反って、Earnshaw家の教育力の弱さを露呈しまう。ここは、Linton家の家庭の力とその階級が示す力を描いている。もっともEdgarの両親は、Catherineが将来、嫁としての候補者とみため、その帝王学を身につけさせた意味もあるだろう。S・GilbertとS・Gubarは、この変身は、Linton家やHindleyが押し付けた男性思想によるものだとCatherineに同情を寄せる。以上、見てきたようにこれが社会的な面としてのLinton家を中心にEdgarを取り巻く様相である。*Wuthering Heights*では、Linton家の価値観が主軸となって描かれている。それは、登場人物の立場、行動には、常に階級意識が内在しているからだ。

上記のように、Linton家とEdgarの周辺を述べてきたことを踏まえ、地主階級として、彼の愛を具体的に考察しよう。*Wuthering Heights*は、HeathcliffとCatherineの二人の永遠の

愛を描く物語としてとらえられ、それを軸にこれまで数多くの研究者によって論じられてきた²⁾。彼らの愛があまりにも大きいため、その他の登場人物の愛が見逃されてしまいがちである。たとえば、Earnshaw氏にも愛は存在する。Liverpoolの街中で身寄りのない孤児HeathcliffをWuthering Heightsに連れてきて、一時的であるにせよ、彼を家族として養う。連れてきた理由は、曖昧であるがEarnshaw氏の慈悲的な愛がそうさせたともいえる（このEarnshaw氏の愛が、その後Heathcliffが引き起こす出来事に結びつくとはEarnshaw氏も予想すらしていなかったのである）。同時に、Nellyや、Isabellaそして、娘のCathy、Haretonにも愛は描かれている。Josephですら、いくらかの愛（たとえその愛が曲がったものであっても）は、見出せるのである。Nellyは、主に家政婦としての母性的な愛が目立ち、CathyとHaretonは、少年期から青年期にかけて、いわゆる恋愛を通じて愛や真心を寄せる。彼ら二人は、作中において罪なき恋愛をするのであるが、この恋は典型的な恋愛モデルである。

愛に至る過程においては、それを熟すべき恋愛期間を要する。では、EdgarとCatherineはどのように好意を寄せていったか概観してみよう。Heathcliffの場合もそうであるが、Nellyは、EdgarがCatherineをどのように好きなのか、またなっていたのかその経緯は、具体的に説明していない。Heathcliffの場合は、Nellyが彼を不適切な扱いをしたことでEarnshaw氏から暇をださる。そのNellyが戻ってきたときには、“on coming back a few days afterwards, for I did not consider my banishment perpetual, I found they had christened him ‘Heathcliff’ … Miss Cathy and he were now very thick” (IV)と漠然とHeathcliffとCatherineの仲を説明する。Edgarの場合も、少し目を離し、Nellyがしばらくして戻ってきたときには、“I (=Nelly) saw the quarrel had merely effected a closer intimacy — had broken the outworks of youthful timidity, and enabled them to forsake the disguise of friendship, and confess themselves lovers (VIII)と述べるにとどめその場面に立ち合っていないこともあり、詳細な説明はなされていない。EdgarとCatherineは、交際期間を通じておそらく、CatherineはLinton家の物質的文化に憧れ、彼の教養で楽しませてもらい一時的ではあったがお互い良好な関係を築いたのである。男性が教養を身につけていることは、女性にとって恋愛の条件の一つであったのであろう。Edgarの教養は書物からであったが、本が読める教養はCatherineには、それが大きな魅力であったのである。では、EdgarはCatherineのどこに女性としての魅力を感じていたのだろうか。NellyはCatherineのことを“she had the bonniest eye, and sweetest smile, and lightest foot in the parish” (V)と彼女の容姿を述べる。Catherineは、この限界で飛び抜けた美しさを誇る人物である。さらに、“she imposed unwittingly on the old lady and gentleman, by her ingenious cordiality; gained the admiration of Isabella, and the heart and soul of her brother (=Edgar) —” (VIII)とLinton一家は、彼女の魔性的な美しさに、皆惹きつけられたのである。Edgarは、彼女の美貌に“the heart and soul”を奪われたのである。そもそもEdgar

はCatherineに対して美しさに惹かれたのは、初めて出会ったときからである。初めて会ったCatherineにEdgarは、“Edgar stood gaping at a distance” (VI) だったのである。Edgarは、出会い頭にCatherineと出会う。彼にとって、思いも寄らなかった“事件”であった。Catherineの輝かしい美貌に一気に恋心を抱く。このとき、Edgarの体が硬直していたのもその恋の激しさを物語る。恋愛において、外見的な要素は、恋の発生源に成り得る例証でもある。交際を続けるEdgarは、彼自身の感情が制御不能の状態に陥る。冷静さをもつEdgarでさえその抑えられない感情をNellyは、次のように言う。

…he possessed the power to depart, as much as a cat possesses the power to leave a mouse half killed, or a bird half eaten. Ah, I (= Nelly) thought, there will be no saving him — He’s doomed, and flies to his fate! (VIII)

Catherineとの揉め事をしたEdgarは、Nellyの意地悪な忠告にもかかわらずCatherineのもとに行くのである。Catherineを自分のものにしたという異性に対する男性の本能が最高潮に達したところである。もう後には引けなく、理性を失い分別を欠き、彼の冷静な判断は完全に失ってしまっている。Nellyの言うように盲目になってしまった瞬間である。Edgarは、Catherineの魅力的な美しさに惹かれ恋心を抱き、結婚へと導いた。当然、彼の心にも利己心がないわけでもない。Catherineを選んだのも、彼女が二番目の屋敷をもつ身分であったこともあり、大きな葛藤もなく、彼女を選べたのである。Edgarは、Thrushcrossの長男である。亡くなったEdgarの両親も結婚を望んでいたと思われる。だから、わざわざCatherineをThrushcrossに招いてLinton家にふさわしい“Lady”になるよう教育を施したのである（それは、家父長の批判もあるが）。CatherineのEdgarへの魅力は、彼が“handsome”, “young”, “cheerful”, “rich”, “love you” (IV) と挙げるのであるが、少なくともこのところの俗的な理由は、Edgarのそれと同じものである。Catherineは、“I (= Catherine) shall like to be the greatest woman of the neighbourhood, and I shall be proud of having such a husband” (IX) と愚直な気持ちを述べる。二人の間柄は、社会制約の中で決まった恋愛である。当時としては、それが自然の流れでもあり時代の趨勢である。だから、Heathcliffを選べなかったこともこの時代が求めた社会制約があつてのことである。Gimmertonでは、EdgarとCatherineの結婚に騒ぐ村人はいなかったはずである。

Catherineは、Edgarの愛を“My love for Linton is like the foliage in the woods. Time will change it, I’m well aware, as winter changes the trees” (IX) と述べる。しかし、彼女にとって「森の中の葉の色」が早々に変化してしまったのである。Catherineは、結婚して目的を達成したころにはEdgarに愛想が尽きているのである。しかも、男性としての魅力も失なわれて

いる。CatherineがEdgarのことを信頼し、尊敬していないことにEdgarの不幸がある。彼女がしきりにHeathcliffのことを褒めちぎる彼女の態度に、Edgarがとった行動にCatherineは、“… he (= Edgar) needn't resort to whining for trifles. It is childish; …” (X) と言って彼の態度に嫌気がさす。Edgarの生い立ちからくる彼の幼稚さと、階級からくる彼の独善的で、押し付けがましい態度に耐えられなくなったのかもしれない。一緒に暮らすことでEdgarの欠点が明らかになったのである。また、あるとき、Catherineは、彼のことを“Your type is not a lamb, it is a sucking leveret” (XI) と喩えて罵倒する。一方で、Catherineは、“Edgar, I was defending you and yours” (XI) とも言う。Catherineも社会制約の中で生きているということは認識している。この彼女の言葉は、Edgarの個人的な面と社会的な面の両者を指すのである。Edgarもその意味を承知しているはずである。EdgarとCatherineの暗黙の共通認識は、この一点のみである。その一方Edgarは、Heathcliffに心を傾倒していくCatherineに詰め寄る。

Will you give up Heathcliff hereafter, or will you give up me? It is impossible for you to be *my* friend, and *his* at the same time; and I absolutely *require* to know which you choose. (XI)

Edgarはどちらかを選ぶことを迫る。彼は、Catherineを責めているのではなく、選んでほしいのである。彼は、Catherineを女性としてみているのである。Edgarの言い分としては当然のことである。Edgarは、男女関係においては、潔癖症である。しかし、Catherineは、選ぶことができない。むしろ、選び切れないのである。

そのような不安定なCatherineに対しても、Edgarは彼女との結婚を後悔しない。Edgarは、Catherineを愛している。だからこそ、2ヶ月間、Catherineが脳膜炎にかかったEdgarは、献身的な看病をするのである。そのときの状況をNellyは次のように語る。

… in those two months, Mrs Linton encountered and conquered the worst shock of what was denominated a brain fever. No mother could have nursed an only child more devotedly than Edgar tended her. Day and night, he was watching, and patiently enduring all the annoyances that irritable nerves and a shaken reason could inflict; and, though Kenneth remarked that what he saved from the grave would only recompense his care by forming the source of constant future anxiety, in fact, that his health and strength were being sacrificed to preserve a mere ruin of humanity, he knew no limits in gratitude and joy when Catherine's life was declared out of danger; (XIII)

ここに、Heathcliffと違うEdgarの妻への自己犠牲の愛が感じられるのである。それは、現在に感謝をし、未来を祈るという宗教どおりであるが、愛を確認できるのである。もちろん、

Edgarの愛は、社会制約上でのことは、先ほど述べたとおりである。にもかかわらず、人間愛としてのEdgarをみて取れるのである。しかし、こういったEdgarのCatherineへの愛をHeathcliffは、次のように弾劾する。HeathcliffはCatherineの病状が気になり、Nellyから情報を聞き出す。Nellyは、次のように答える。

I (= Nelly) 'll inform you (= Heathcliff) Catherine Linton is as different now, from your old friend Catherine Earnshaw, as that young lady is different from me! Her appearance is changed greatly, her character much more so; and the person, who is compelled, of necessity, to be her companion, will only sustain his affection hereafter, by the remembrance of what she once was, by common humanity, and a sense of duty! (XIV)

Heathcliffは、一応、納得したかのように見せかけて次のように言う。

'That is quite possible', remarked Heathcliff, forcing himself to seem calm, 'quite possible that your master should have nothing but common humanity and a sense of duty to fall back upon. But do you imagine that I shall leave Catherine to his *duty* and *humanity*? and can you compare my feelings respecting Catherine, to his?' (XIV)

とEdgarの愛情を批判する。どちらが本物の愛情かを問い、Edgarの愛情は、彼が世間をもつ身分であるがためのもので、その地位ゆえの単なる「義務感」と「人間愛」であり、Heathcliffはその愛情は、偽ものだと主張する。Heathcliffは、そういった打算ゆえの愛情ではないと純粋な愛を訴える。しかし、Nellyは“Linton lavished on her the kindest caresses, and tried to cheer her by the fondest words” (XIII) とEdgarがCatherineをやさしく看護する様子を述べる。これは、たとえ、NellyがEdgar側に寄っていたとしても真実のことを言っているのである。Edgarの愛は、Heathcliffからみたら小さいこと、むしろ本質ではないと映る。しかし、気を病んだCatherineを懸命に看病することで、Edgarなりに必死に本質の愛を目指しているのである。ある意味において、献身的に接することで罪滅ぼしをして、「偽」の部分の埋め合わせをしているのである。世間を生きる、Edgarの誠実な愛なのである。T・Eagletonも “There is something insipid about Linton, but his concern for Catherine is not in the least shallow; if his pity and charity are less fertile than Heathcliff's passion, they are also less destructive”³⁾ と述べる。

Heathcliffは、Catherineに対して永遠の愛を自認している。Heathcliffは、“If he (= Edgar) loved with all the powers of his puny being, he couldn't love as much in eighty years, as I could in

a day” (XIV) と言い、自分のその愛を力説する。Heathcliffの自信のある言い分にもそれなりに根拠と説得力がある。それは、Catherineの死後顕著になる。周知のとおり、しばしば評論されるひとつの解釈として、Heathcliffは、Catherineが亡くなった後でも魂の一体化を求めて、18年間さまよい苦しむと言う。これは、著者も同感である。一方、Edgarも彼女の死においては悲しみくれ、実際に彼を隠者にしてしまうほど影響を受けるのである。Edgarの場合は、時間とともに彼女の死を受け止め、それを大切な思い出として心の中にしまい込み、娘Cathyにその感情を向け生活していくのである。自分の感情を合理的に折り合いをつけるのである。

HeathcliffがEdgarのことを批判することで、より一層Edgarの愛が明確になる。Edgarの愛は、普遍性の現世の愛である。彼の愛には、自己愛にしてエゴイズムとしての愛の側面も忘れてはならない。Nellyはいみじくも述べる（ときとして、Nellyは、われわれに一つの真理を提供する）。

Well, we *must* be for ourselves in the long run; the mild and generous are only more justly selfish than the domineering. (X)

と言う。愛の中に潜む自己保身の一面である。たとえば、Linton家を今後も継承していかなくてはならないために嫁をもらい、男子が生まれなければならない事情がある。それは、将来的なことでもあるのだが、自分のためのことでもある。このことはEdgarの気持ちに否があるということではない。だれもが、社会を生き抜くという視点に立てば同様なことは、行うことである。愛の内部には、エゴイズムの面、自己愛の面は普遍的に含まれる。それは、自己を愛すことで、他人をも愛せる力の源となり必要なものなのである。

では、Edgarの愛は何であったのか。Catherineの容姿に恋をした彼は、彼女と結婚するに至り、その後、誠実にその責任ある愛を貫き通したのである。EdgarもHeathcliffに負けず劣らず、その行動と表現は違えこそ情熱的な愛があるのである。EdgarとCatherineの幸福期間は、わずかなものであったが、Catherineが死亡するまで、Edgarは、彼女を一方的で、独善的ではあるが、社会的な面と個人的な面の両面にて彼女を愛し続けたのは確かである。その愛が自己愛に支えられていたにしてでもある。そのEdgarの愛は、献身、忍耐、保守に収斂されよう。それは、彼の属する階級から来ているのである。Emilyは、Edgarの人間性に基づく愛を深く描いている。同時に、人間の取る行動の根拠も提示する。その卓越した描写は、娘のCathyとHaretonの恋愛にも表されている。二人の愛情の深さが、本来恋愛がもつ効果をもって詳細に描かれている。その恋愛は、高いところに望みを置き、成長したいという願望である。この小説は、生きる現実を見つめ、あらゆる社会制約を考慮に入れて書かれた作

品である。故に、*Wuthering Heights*における愛の解釈、読み方はあらゆる角度から論ぜられる余地はまだ十分に残されている。今後も考察は続けられる。

註

作品からの引用は、すべて Penguin Book 版による。Emily Brontë, *Wuthering Heights*, David Daiches, ed (Harmondsworth: Penguin Books 1985) テキストにおけるその該当する章に関しては、引用に続き括弧内のローマ数字でそれを示した。

- 1) Sandra M. Gilbert and Susan Gubar, *The Mad Woman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*, (New Haven and London, Yale University Press, 1979), p. 281.
- 2) cf. 拙論「ヴィクトリア時代と *Wuthering Heights*」(『言語と文化』第18号, 愛知大学語学教育研究室, 2008), pp. 47-58.
- 3) Terry Eagleton, *Myths of Power — A Marxist Study of the Brontës* (London: Macmillan Press, Second Edition, 1988) p. 120.

参考文献

- D. キャナダイン, 『イギリスの階級社会』, 平田雅博, 吉田正広訳 (東京, 日本経済評論社, 2008)
- J・P ブラウン, 『十九世紀イギリスの小説と社会事情』, 松村昌家訳 (東京, 英宝社, 1987)